

# 新 おおさか KEYわーど 【第7回】

## 大阪のアートを支えた老舗の記念の年 ホルベイン画材とカワチ画材

芸術の秋である。美術館や博物館も新型コロナウイルス感染症の対策で大変だが、こんな時期だからこそ、アート作品に触れる機会があることは大切であり、人を励まし、癒やし、勇気づける芸術の力は偉大である。

今年、大阪の美術にとって重要な二つの会社が記念の年を迎えた。一つは、絵具メーカーとしても知られる「ホルベイン画材」の創業120年である。明治33(1900)年、文具を販売する吉村峯吉商店として中之島に設立された。国立国際美術館や科学館の西側、土佐堀川にかかる常安橋の北詰である。明治41(1908)年の広告に高等文房具商として載り、絵具チューブの形に「油画、水彩画、絵具各種」と記されている。大正13(1924)年、吉村洋画材料店となり、昭和8(1933)年、ホルベイン洋画材料研究所を設立して絵具の開発に乗り出した。



明治41(1908)年の『関西時報』に載る吉村商店の広告。真ん中に絵具のチューブがデザインされている。

もう一つが大正9(1920)年、吉村商店の河内俊が独立した、今年が創業100年となる心齋橋の「カワチ」である。河内洋画材料店の名で知られ、筆とパレットを持つ「画人印」のマークも有名である。現在は画材だけではなく、額縁、デザイン、設計用品、コミック、文具まで手広く商売の対象とする。創業100年の記念誌『心齋橋 KAWACHI 100年』に、近代大阪の美術の歴史と同店の結びつきを書かせてもらった(残部僅少、お問い合わせはカワチ心齋橋店まで)。

以前から気になっているのが、洋画家小出樞重(1887~1931)の絵日記『断雲日録』である(表紙)。明治43(1910)年8月5日の頁に次のようにある。

「夕立ち雲も今日はのこりなく晴れ渡って朝は殊に涼しい。天王寺の公園にスケッチに行った(中略)三時頃からスケッチ板の箱を買ひに常安橋へ巡航船で行った。道頓堀の川の波が午后の太陽にてらされて美しかった。」

「スケッチ板」は、紙を置いて描くための画板ではない。カンヴァスがわりに直接、絵具を塗って描くための小さな板である。写生に出て生乾きの絵具が隣の板に着かないようにそれを収める専用の箱があり、昭和4(1929)年の河内洋画材料店目録に載る「スケッチ板携帯箱」は、サム

ホールの大きさから8号の大きさまで、3枚用と6枚用があった。

『断雲日録』に小出が描いているのが、道頓堀にあった巡航船の乗船場である。現代ならば水上バスだ。天満橋まで巡航船で通学した詩人の杉山平一(1914~2012)によると、乗船場と書かれた石段を降りると、小さな改札口

のついた停留所が川に浮かんでいたという。川波がびちゃびちゃと停留所の横べりをたたき、大きなエンジンのついた伝馬船でも通ると、うねりで停留所も大きくゆれたという(杉山平一『巡航船』編集工房ノア、2009年)。

地下鉄もない時代のこと、市内の移動に船舶の利用は便利だったのだろう。客を乗せて船は次々と船着き場を結んでいった。小出がスケッチ板の箱を買いに常安橋に向かったとすれば、行く先は吉村商店だったはずだ。

佐伯祐三(1898~1928)にも、常安橋より一つ上流の筑前橋付近で描いた《中之島風景》(大阪朝日新聞社所蔵)がある。これも画材調達で吉村商店に立ち寄った際、絶好の写生地を見つけてイーゼルを立てたのかもしれない。

小出が尊敬していた画家が、ヘンリー8世、トマス・モア、エラスムスの肖像画で知られるルネッサンスの大画家ハンス・ホルバイン(Hans Holbein)である。重要文化財に指定されている小出の《Nの家族》(1919年、大原美術館所蔵)の机にホルバインの画集が置かれているのが、その証拠だろう。ホルベイン画材の名も小出と関係しているのではないか、そのことが私は気になって仕方がない。

水都大阪らしい、川と巡航船と画家と画材店の物語である。



「スケッチ板携帯箱」絵具が隣の板に着かないように、スリットのあるところに風景画を描いた板を収納する。(『河内洋画材料店』のカタログより)

### 筆者プロフィール 橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長/大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大分イメーger増殖するマンモス/モダン都市の現像―』(創元社)など。